

(熊毛郡中種子町砂中宇三角山)

位置と環境

三角山 I 遺跡は種子島のほぼ中央部にあり、西之表市と中種子町の境の山間部に位置している（第 1 図）。標高は約240mあり、島内では最高所に近い丘陵地にある。丘陵地は種子島の脊梁部分が浸食により開析されたもので、平坦面や南・東向きゆるい斜面を中心に遺跡が複合して分布している。また周辺には谷を挟むような形で三角山 II・III・IV 遺跡が点在している。

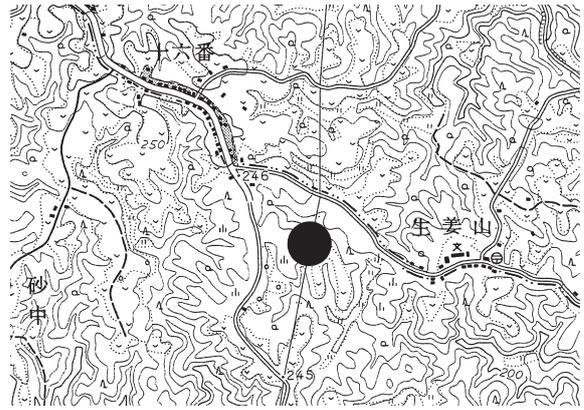
調査の経緯

航空機のジェット化に対応するため、2000mの滑走路をもつ新種子島空港の建設が計画された。それに伴い平成 7 年（1995年）から鹿児島県教育委員会により、計画地内で発見された遺跡の確認・本調査を実施している。調査対象地は全体で約11haにおよび、そのうち三角山 I 遺跡は 7 ha を占めている。平成 8 年から本調査を開始し、平成14年に終了した。

遺構と遺物

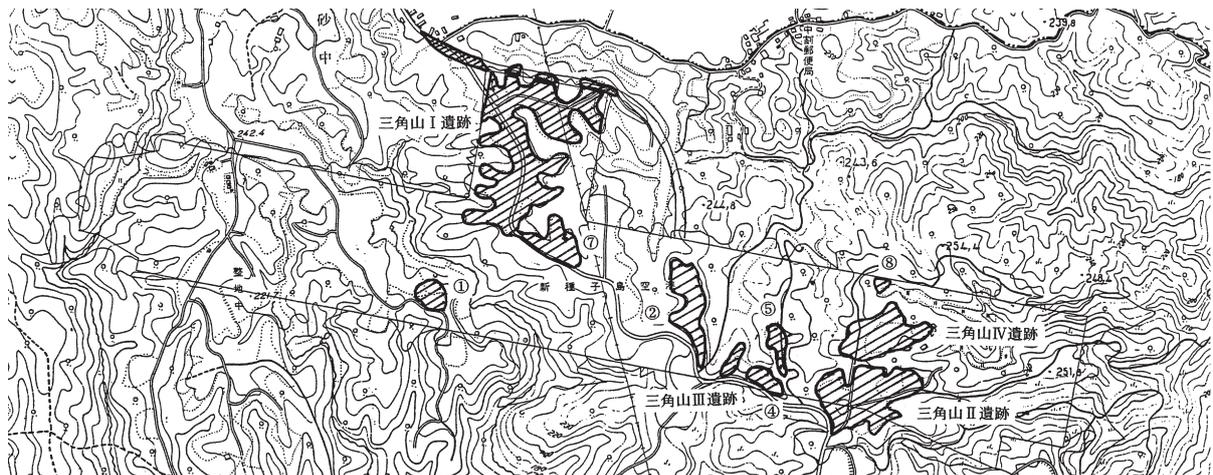
縄文時代草創期・早期・前期の複合した遺跡である。

縄文草創期では土器の表面に粘土紐（隆帯）を貼り付け、その上に刻み目を施した隆帯文土器など約 4 千点の遺物が出土している（写真 1）。これらの遺物が約 6 千㎡の調査範囲の中で数か所のまとまりをもって出土しており、ひとつの台地上における遺構や遺物の分布状況をとらえることができた。



第 1 図 三角山 I 遺跡の位置

出土した隆帯文土器については、隆帯の条数や刻み目を施す工具にいろいろなパターンが認められ、指先や棒状・ヘラ状の工具などのほか、貝殻を押つけて刻み目をつけたものが多く出土している。近年種子島では西之表市の奥ノ仁田遺跡や鬼ヶ野遺跡など草創期の大規模な遺跡の発見が相次いでいるが、いずれの遺跡でも貝殻が多用されている。この貝殻刻み目の隆帯文土器は種子島の特色のようである。完形に復元できた土器20点近くもあり、丸底ボウル状の器形が最も多い（第 3 図 1・2）。1 は口縁部に 3 条の隆帯が密接して巡り、棒状の工具で細かな刻み目を施している。口径は約24cm、器高は約16cmである。2 は口縁部と胴部に 2 条の隆帯が巡り、隆帯上には貝殻の殻頂部を押し当てて刻み目を施しているものである。口径は約22cm、器高は約15cmである。二つの土器は同じまとまりから出土しているのではなく、20m程離れた土器集中地点からそれぞれ出土している。そのほか平底に近いものや上げ底になっ



第 2 図 新種子島空港予定地内の遺跡

ているもの、本土内の草創期遺跡で出土しているような屈曲した胴部を持つものなどが出土している。

石器には打製石鏃、磨製石鏃、磨製石斧、砥石、磨石、石皿などが出土している。特に磨製石鏃が4点出土しているが（第3図3）、これまでは奥ノ仁田遺跡で1点発見されているのみであり、貴重な資料である。打製石鏃は正三角形に近い小型のものが多いが（第3図4・5）、やや大型で剥離を深く施して鋸歯縁を呈するものもある（第3図6）。石材には頁岩が多く利用され、黒曜石やチャートも利用されている。島内にない黒曜石はこの時期から種子島に持ち込まれているようである。

縄文草創期の遺構では集石が6基検出した。1基は楕円形の掘り込みの中に焼け石が入っているもの（写真2）で、下部には炭化物が多く含まれており、繰り返し使用された状況が窺える。掘り込みの埋土には薩摩火山灰が多く含まれており、この集石が薩摩火山灰で埋もれたことを物語っている。

平成13年の調査では竪穴住居跡2基を検出した。台地の基部に近い平坦な場所につくられている。1号竪穴住居跡（写真3）は2.6m×2.6mの円形で、検出面から約25cmの掘り込みをもつものである。床面のほぼ中央部には径30cm程の炉と考えられる焼土が検出された。その他床面からは胴部とみられる土器片や礫が出土している。2号竪穴住居跡（写真4）は1号より一回り大きく3.3m×3.2mの円形で、検出面から約30cmの掘り込みをもつものである。床面は平坦で、壁はほぼまっすぐに立ち上がっている。焼土は検出されなかったが、床面からは貝殻刻目の隆帯文土器片が出土した。柱穴は確認されていない。

縄文時代早期では、石坂式土器・吉田式土器・塞ノ神式土器・苦浜式土器などが出土した、主体となるのは塞ノ神式土器・苦浜式土器で、集石遺構を多数検出した。打製石鏃（第3図7）のほか特徴的な石器としては磨製石鏃があり、中央に穿孔をもつもの（8・9）や扁平なもの（10）、縁辺部に剥離を施



写真1 隆帯文土器出土状況（貝殻刻目）

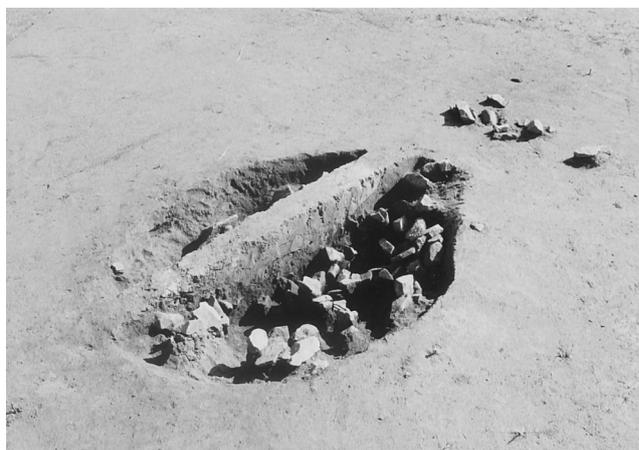


写真2 掘り込みのある集石



写真3 1号竪穴住居跡



写真4 2号竪穴住居跡

したもの(11)、細身に基部に穿孔の跡が残るもの(12)などが出土した。いずれも塞ノ神式土器に伴うものである。また塊状耳飾り(13)が1点出土している。直径が1.8cmの金環形で滑石製で、右京西式と呼ばれる土器に伴っている。

縄文時代前期は集石・轟式土器・曾畑式土器などが発見された。遺跡周辺はアカホヤ火山灰まで削平されているところが多く、詳細は不明である。

特徴

全国的に見ても縄文時代草創期の大規模な遺跡であり、屋内に炉をもつ竪穴住居跡、多量の隆帯文土器、磨製石鏃の出土などから当時の人々の発達した暮らしぶりが窺える。また種子島では初めて縄文時代草創期を画期する鍵層である薩摩火山灰(約11,500年前)が検出され、その下層に隆帯文土器が出土することが確かめられたことから、層位的にも南九州本土と直接対比することが可能になった。

縄文時代早期の塊状耳飾り、アカホヤ火山灰の下

から発見された例が全国でも少なく、年代の上限を押しえられた最古級の資料として注目される。

穿孔のある磨製石鏃は島内でほかに3例出土例があるのみで、種子島以外では発見例のないものである。

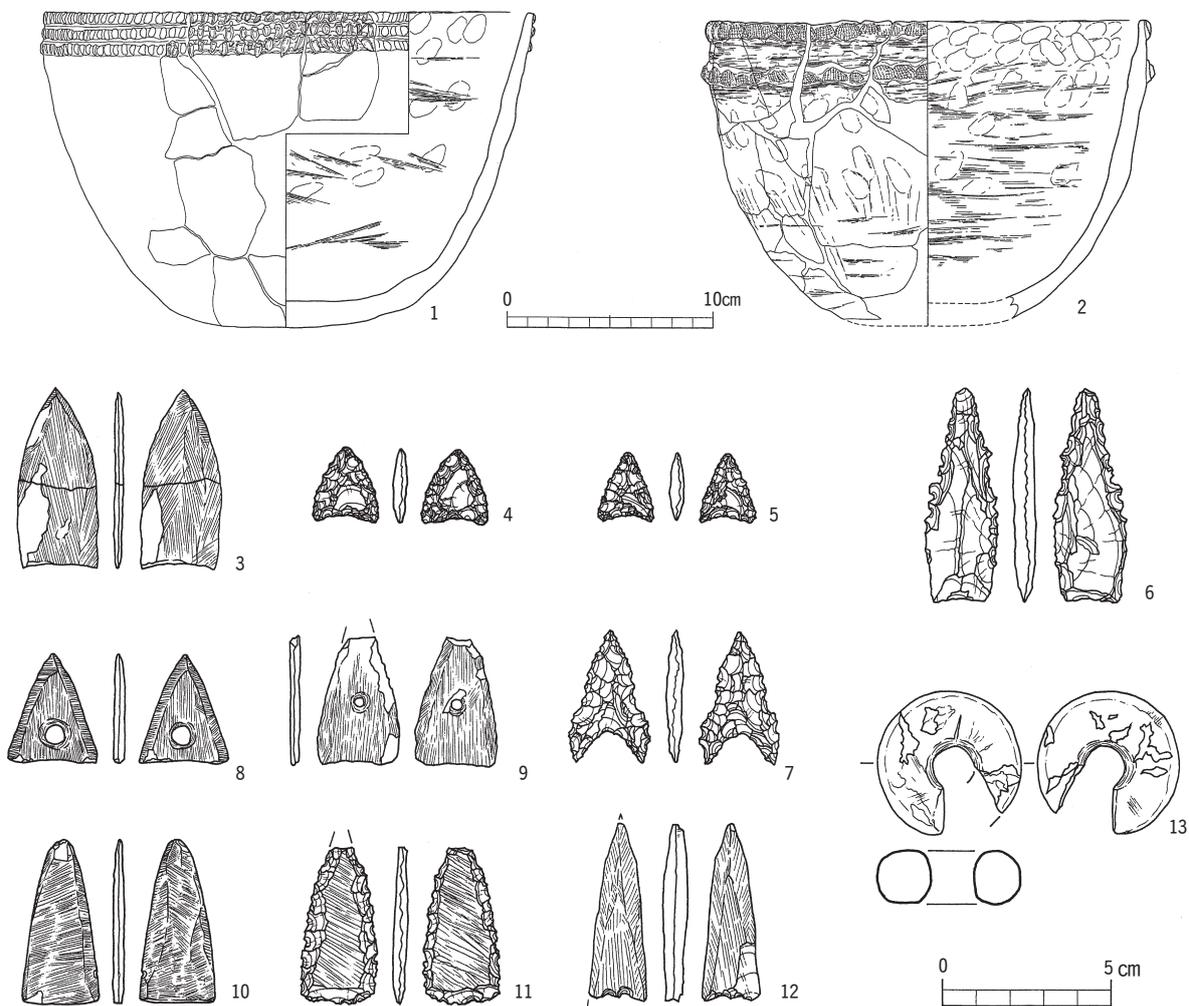
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003「三角山I遺跡(P地点)」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(46)

(大久保浩二)



第3図 三角山I遺跡の出土遺物